View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

duan, tuon, machen について

著者	武市 修
雑誌名	ドイツ文学
巻	92
ページ	55-65
発行年	1994-03
その他のタイトル	Zum Gebrauch von duan, tuon und machen
URL	http://hdl.handle.net/10112/2036

duan, tuon, machen について

武　市　修

1. はじめに

元来 legen, setzen, stellen 等を意味していた動詞 tun[1] は次第にその意味範囲を広げ，本来の意味から行為一般を表わし，さらに，人だけでなく物・事をも主語として様々な目的語をとるようになる。そして古高ドイツ語 (Ahd.)，中高ドイツ語 (Mhd.) では同じ動詞の繰り返しを避けるための多様な用法があり，動詞的意味をもつ名詞や不定詞を伴った迂言的表現にも用いられた。新高ドイツ語 (Nhd.) では厳密な意味での代動詞としてはその機能を失い，他の用法においても machen にとって代わられることが少なくない tun が，Ahd., Mhd. おいては後に表で示すように machen に比べて圧倒的に多く用いられたのはなぜなのか，現代語でそれが逆転する可能性を machen がすでにもっていたのか筆者には以前から関心のあるところである。代動詞としての tuon については以前に紹介したので[2]，本稿では主として迂言的な用法を中心に Ahd., Mhd. における duan, tuon のいくつかの作品における用例を示し，併せて ahd. mahhôn, mhd. machen についても概観して上の疑問に答える一助にしたい。なお，ここで言う Ahd., Mhd. とはラテン語からの翻訳聖書物語ともいえる散文の『タツィアン』とドイツ文学史上最初の脚韻文学たるオトフリートの『総合福音書』および宮廷韻文文学の諸作品で用いられた言葉であることをお断わりしておく。

2. duan, tuon の様々な用法

先ず legen, setzen, bringen 等の本来の意味では方向規定の語句を伴い，

dua huldi thino ubar mih (O. I. 2, 48)[3] (下線部は筆者，以下同様)

あなたの御慈悲を私の上にたれ給え

diene weiz ich war ich tuo (Iw. 2837)[4]

彼女(妻)をどこへやったらよいのか分かりません

---

1) この不定形は Ahd. では『タツィアン』で tuon，オトフリートで duan, Mhd. では tuon であり，本稿においては適宜それぞれの作品で用いられた形を示す。

2) Vgl. O. Takeichi: Zum Ersatzverb *tuon*. In: Sprachwissenschaft 17 (1992) Heft 2, S. 200–221.

3) Otfrids Evangelienbuch. Hrsg. v. Oskar Erdmann, 6. Auflage, besorgt von Ludwig Wolff (ATB 49), Tübingen 1973 (=O. I. 2, 48 usw.).

4) Hartmann von Aue: Iwein. Hrsg. v. G. F. Benecke und K. Lachmann, 6. Ausgabe; Unveränderter Nachdruck der 5., von Ludwig Wolff durchgesehenen Ausgabe, Berlin 1966 (=Iw.).

この意味の用法は Nhd. でもまだ残っており，その場合，中世ドイツ語と同様もっぱら an, aus, hin, weg, dazu 等の副詞(たいていは分離動詞の前綴りとなっている)，あるいは前置詞句の方向規定を伴って用いられる。この意味から tuon はまた，人の3格と共に「人に物・事を与える，加える」の意となる。

werent iuch, tuot er iu iht (Iw. 5296)

もしそなたにそれ(獅子)が何か危害を加えるような

ことがあれば，身を守るがよい

tuon は「行う」，「実行する」の意味から転じて，非常に多様な目的語をとる。

Ni mag guot boum ubilan uuahsmon tuon noh ubil boum

guotan uuahsmon tuon (Tat. 41, 4)[5]

良い木が悪い実をならせることも悪い木が良い実をならせることもできない

さらに imo angust giduan (*nhd. ihm angst machen* O. IV. 6, 29), daz ambet tuon (*nhd. den Gottesdienst halten* Iw. 1409), den fride tuon (*nhd. Frieden gewähren* Nib. 2203, 2)[6], ir letze goume tuon (*nhd. auf ihre Schutzwehr acht haben* Parz. 205, 19)[7], meinræte tuon (*nhd. verraten* Nib. 906, 3), 不定の ez をとって ez guot tuon (*nhd. tapfer kämpfen* Nib. 221, 3) 等。また gouma tuon (=goumen *nhd. ein Festmahl halten* Tat. 79, 4), ubarwant todes duan (*nhd. den Tod überwinden* O. V. 10, 12), thes duan ih mihilan ruam (*nhd. das rühme ich sehr* O. S. 10), entwich tuon (=entwîchen *nhd. entweichen* Parz. 573, 13), widerkêre tuon (*nhd. zurückkehren* Iw. 557) 等，動詞的概念をもつ名詞と共にいわゆる機能動詞として用いられることが，Nhd. と比べてとりわけ多くみられる。Ahd. ではまた thaz 文を目的語にとって，

ni mohta theser thie inteta ougun thes blinten tuon

thaz theser ni sturbi (Tat. 135, 22)

あの盲人の目をあけたこの人もこの男(ラザロ)が死なない

ようにはさせられなかったのか

Dua, theiz in thir scine (O. V. 2, 17)

それ(十字架の印)があなたに現われるようにしなさい

thaz 文を先取りする代名詞を伴う例，これは Mhd. でもある。

Ni thaz si thaz thoh datin thaz sie nan irknatin (O. V. 9, 11)

彼らは彼が誰だか分からないままに

---

5) Tatian. Hrsg. v. Eduard Sievers, 2. neubearbeitete Ausgabe; Unveränderter Neudruck, 1966 Paderborn (=Tat. 219, 2 usw.).

6) Das Nibelungenlied. Nach der Ausgabe von Karl Bartsch, hrsg. v. Helmut de Boor, 20. revidierte Auflage, Wiesbaden 1972 (=Nib.).

7) Wolfram von Eschenbach: Parzival. Hrsg. v. Albert Leitzmann, 7. Ausgabe, revidiert von Wilhelm Deinert (ATB 12, 13, 14), Tübingen 1961-65 (=Parz.).

daz ichz von unstæte tuo, / daz ich iuwer alsô vruo /

gnâde gevangen *hân* (Iw. 2301–3)

私が移り気のためにこんなにも早くあなたを許すようなことをすると

代名詞で先取りするのが thaz 文でなく，定形の動詞句の例，

Giwisso wizit ir thaz: Moyses er ni deta thaz,

mit datin odo mit worton mir wolti widarwerton (O. III. 16, 25 f.)

しかと心得ておきなさい，モーゼは行いでも言葉でも

私に逆らうようなことはしなかったということを

先取りする代名詞がなく，duan で表される具体的内容が直後に新たな文で続いて，

„Jah ih", quad er, „druhtin, duan; giloub ih fasto in thinan duam!"

(O. III. 20, 179)

『誠に』と彼(盲目に生まれついた者)は言った。『主よ，あなたの

お力をしかと信じることに致します。』

このような tuon は本来の「する」，「行う」の意味が薄れ，リズムを整え脚韻を踏んだり，叙述を強調するための冗語的用法となる。そのような用法ではさらに joh, und で接続する後半の述部で述べられる内容が，あらかじめ前半部で duan, tuon によって示唆されることもある。

Sie ouh tho so datun joh noh tho zuivolotun (O. V. 11, 27)

彼らはその時もまだ疑っていた

daz er die altern bæte / daz sîz durch got tæte /

und der jungern teilte mite (Iw. 6919–21)

神様のために妹姫に遺産を分けるよう姉姫に王から頼んでくれるように

und に当たる joh なしに，文ではなく定形の動詞句が duan と直接並べられ強調されて，

„Oba thu", quad er, „datist, thia gotes gift irknatis (O. II. 14, 23)

『もしあなたが』と彼は言った。『(それが)神の贈り物であると分かれば

さらに定形の動詞句でなく，不定詞[句]と共に用いられることもある。

thie wizzi dua mir meron zi thines selbes eron (O. III. 1, 28)

あなたご自身の誉れのために私の分別を増して下さい

duan と不定詞によるこのような迂言的表現は古高ドイツ語ではまだわずかしかみられず，『タツィアン』では皆無であり，オトフリートでもこの1例しかない。不定詞を伴う tuon は元来，使役的な意味であった。そして，文の主語と異なる，不定詞の主語に当たるものは4格，ときに3格で表された。しかしその4格あるいは3格がなく不定詞の主語が文の主語と一致する場合は，tuon が助動詞として不定詞の定形を用いる代わりの迂言的表現となり[8]，さらに不定詞は名詞化した動作名詞と感じられ冠詞，所有

8) Vgl. J. Grimm: Deutsche Grammatik IV. Hrsg. v. G. Roethe und E. Schröder; Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Gütersloh 1898, Hildesheim 1967, S. 94.

代名詞，形容詞等が付されることにもなる。tuon は本来の意味を失って，いわば機能動詞化するのである。この迂言的表現は上述のように中世ではまだ少なく，近世以後とくに俗語において *essen tun*, *schreiben tun*, *lesen tun* 等のように多用されるようになった[9]。現代語でも，*Kochen tut sie nicht gern* や *Sie tut gerade schreiben* あるいは *tun* の接続法第2式が *würde* の代わりをし，*Wenn bloß ein bißchen Luft gehen täte* 等の用法にこれらの名残がみられる。

ここで不定詞を伴う tuon の用法について見てみよう。先ず，『タツィアン』ではこれは7例みられ，すべて使役的用法である。例えば，

ther thie sunnun ufgangen tuot ubar ubile inti ubar guote (Tat. 32, 3)

この方(天の父)は悪い者の上にも良い者の上にも太陽を昇らせ給い

オトフリートでは不定詞を伴う duan は極めて少なく，上の迂言的表現1例以外に次のように使役的用法が2例あるだけで，それも duan+zi 不定詞である。

uns duit sin kunft noh wanne thaz al zi wizanne (O. II. 14, 76)

いつかその方が来られたら私たちにそのことをすべて知らせて下さるでしょう

Mhd. では不定詞を伴う tuon の用例は使役的用法，迂言的表現とも散見する。

unt tuo dîn heilic ôre sich entsliuzen / gein mîner bete (Zweter 226, 8 f.)[10]

私の願いに対してあなたの尊いお耳をお開き下さい

この用法は詩人や作品によって大きく異なっており，例えばハルトマンでは叙情詩を除く全作品で12度この結びつきがみられるが，そのうち使役的用法が『イーヴァイン』と『エーレク』でそれぞれ4度ずつ，名詞化された不定詞[句]をとる用例が不定詞を先行詞とする関係代名詞の2例を含んで4度だけであり，純粋の迂言的用法は1例もない。これに対し『ニーベルンゲンの歌』では，逆に，使役的意味の用例は皆無であり，28例が名詞化された不定詞をとり，2例が迂言表現である。

der die liute hie zestunt / dir engegen lachen tuot (Er. 8103 f.)[11]

今ここで人々をしてあなたに対し微笑ましめる(あなたの赤い口)

ich weiz iuch, küneginne, sô zornec gemuot,

daz ir mich unde Hagenen vil swache grüezen getuot (Nib. 2363, 3 f.)

王妃よ，私には分かっている。そなたはあまりの憎しみの心ゆえに

私とハゲネにろくに挨拶もしないのだ

dô wart vil michel dringen von helden dar getân (Nib. 280, 2)

勇士たちが大勢そこへ押し寄せることが行われたのであった

このような名詞化された不定詞がなお動詞の機能も残していることは，形容詞が付加し

9) Vgl. Ebenda.

10) Die Gedichte Reinmars von Zweter. Hrsg. v. Gustav Roethe, Leipzig 1887; Nachdruck, Amsterdam 1967 (=Zweter).

11) Hartmann von Aue: Erec. Hrsg. v. Albert Leitzmann, 5. Auflage, besorgt von Ludwig Wolff (ATB 39), Tübingen 1972 (=Er.).

ながら副詞や4格の目的語をとっている上の例からも明らかである[12]。『ニーベルンゲンの歌』では30例のうち24例は不定詞[句]が主語の受動表現であり，getân が行末で押韻に用いられ，さらに23例で wart ～ getân と過去になっている。これは劇的に進展して行く筋の展開を無名の語り手が「～することが行われたのであった」と聴衆に語り伝える，この英雄叙事詩の特徴の一端を表していると考えられる。『パルツィヴァール』ではこれらの表現はわずか14度と少なく，うち受動が9例である。その内訳は使役用法が (ze wizzene tuon の2例を含めて) 4例，純粋の迂言表現が1例，名詞化された不定詞を伴うのが9例である。

dem was ze wizzene getân, / der künec Gramoflanz wære komen (Parz. 727, 24 f.)

彼(ガーヴァーン)にもグラモフランツ王が来たことが知らされていた

daz ir manlîche sinne / und herzehaften hôhen muot /

alsus enschumphieren tuot (Parz. 291, 6–8)

あなたが雄々しい心，勇敢な高揚した気持ちをそのように打ちのめすこと

doch wart dâ ringens vil getân (Parz. 131, 21)

それでもそこで大いに格闘が行われた

3. machen と duan, tuon

machen の用法は大別して次の3つに分けられる。

a) 4格の目的語を1つだけとって，基本的には machen, tun, verrichten, bewirken, bewerkstelligen 等の意味

b) 4格の目的語の他にその目的語の述語に当たる目的補語をとって，基本的には「～を～にする」という意味

c) 再帰代名詞を伴う用法

先ず，a) の用法では，

mit gotkundlichen rachon scal man sulih machon (O. II. 8, 22)

そのようなことは神のお力を借りてしなければなりません

daz ime sit michel ungemach / und leit begunde machen (Trist. 15192 f.)[13]

それが後に彼に大きな困難と悩みをもたらすことになった

「作る」の意味の他に，urheiz (O. IV. 18, 18), hôchzît (Er. 9770), smac (Trist. 7836), wec (Iw. 5187), wunder (Trist. 3716) 等様々な目的語をとるが，Ahd. では duan と同じように thaz 文を目的語にとって，

„Gimachon", quad, „in wara, thaz thar nist manno mera,

ni si ekordo in girihti sin emmizig giknihti." (O. IV. 8, 21 f.)

---

12) 副詞 dar が dringen にかかることは de Boor も指摘している。Vgl. Das Nibelungenlied, Anm. zu 280, 2.

13) Gottfried von Strassburg: Tristan. Text, Nacherzählung, Wort- und Begriffserklärungen, Darmstadt 1967 (=Trist.).

『確かに』と(ユダが)言った。『私は誠にあの人のいつものお付きの者たち
以外にはそこ(彼のそば)に誰もいないように取り計らいましょう』

Mhd. では tuon が先行詞の daz, ez なしで直接 daz 文を目的語とする用例はきわめて少ないが，machen にはいくつかみられる。

Hôhiu minne reizet unde machet / daz der muot nâch
hôher wirde ûf swinget (Walth. 47, 7 f.)[14]

高いミンネは人の心を動かし / 高い価値を求めて飛翔させる

und machet daz dem hilft sîn mout / gelîche alsam disem sîn guot
(W. gast 6205 f.)[15]

[神は]前者(富める者)には富が助けるのと同じように
後者(貧しい者)にはその心がけが助けるようにお計らいになる

b) の用法ではふつう形容詞，分詞形容詞が目的補語となり，語尾変化する場合としない場合がある。

Sar Kriachi joh Romani iz machont so gizami,
iz machont sie al girustit, so thih es wola lustit;
Sie machont iz so rehtaz joh so filu slehtaz (O. I. 1, 13-15)

とりわけギリシャ人とローマ人たちの創作は
あなたが満足するほどにみごとですばらしく
彼らはそれを大層まっすぐな，また素朴なものにする

上例の iz は文字によって自分の民族の武勲を語り伝えること，あるいはそれらの作品を漠然と表している不定の目的語とみられるが，「それを gizami なもの，girustit なもの，reht で sleht なものにする」。gizami は無変化の形容詞，girustit は rusten の過去分詞であり，rehtaz, slehtaz はそれぞれ iz と同じ中性4格の語尾が付いている。

machen が4格の目的補語に形容詞をとる例は，数少ない machen の用例の中では比較的多く，『イーヴァイン』でも (sî) machte sî zehant von vreuden bleich unde rôt (2202 f.), dû machest rîche in kurzer vrist einen alsô swachen man (3550 f.), lât mich iuch machen gesunt (5464) 等，『ニーベルンゲンの歌』でも，6例しかない machen のうち4例がそうである (z.B. si wolde machen rîche alle Rüedegêres man 1270, 4)。『トリスタン』でもこの用法はいくつかみられる。

ez machet ime sin arbeit / senfte und harte lihtsam (Trist. 3874 f.)

それ(希望)は彼の苦労を和らげ，たいへんたやすいものにした

このような用法でも通常 tuon がよく用いられ，Ahd. ではオトフリートで67例あり，『タツィアン』では形容詞をとる32例 (z.B. tuot rehto sino stiga 13, 3 主の道をまっ

14) Walther von der Vogelweide: Gedichte. Hrsg. v. H. Paul, 10. Auflage, besorgt v. Hugo Kuhn (ATB 1), Tübingen 1965.

15) Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirclaria. Hrsg. v. H. Rückert, mit einer Einleitung u. Register v. F. Neumann, Berlin 1965 (=W. gast).

すぐにせよ）の他に，さらに名詞をとるのが15例ある。例えば，

ni curet tuon hus mines fater hus coufes (Tat. 117, 3)

私の父の家を商売の家にするなかれ

Mhd. では tuon が形容詞をとる例は多数，また分詞形容詞をとるのもある程度みられるが，4格名詞を補語にとる例は調べた範囲では見当らない。ところが machen は形容詞だけでなく名詞も補語にとる。

daz ich iuch . . . / . . . / beide ritter mache (Trist. 12738-40)

そなたたち二人を . . . 騎士にとりたてること

また tuon が4格の名詞の代わりに，ze＋名詞をとる用例は Ahd. では『タツィアン』で3例，オトフリートで11例みられる。

her teta thaz uuazar zi uuine (Tat. 55, 1)

主は水をぶどう酒に変えられた

Dua thir zi giwurti scono furiburti (O. I. 18, 39)

よき節制をあなたの喜びとしなさい

Mhd. ではこの用法も tuon にはなく，machen が用いられる。

die wile ir iuwer vröude also / an iuwerm wibe swachet /
und si ze spelle machet (Trist. 18388-90)

こんなふうにご自身の奥方をけなしてご自分の喜びを損ない，
奥方を宮廷や国中の噂の種になさるようでは

ich machete in ze ritter und gap im mîn golt (Nib. 1755, 3)

私は彼を騎士にとりたて，私の黄金を与えた

動詞的概念をもつ名詞を目的語にして一種の機能動詞的な用法が tuon に数多くみられることは先に述べたが，machen もすでに古高ドイツ語でそのように用いられ，Mhd. でもその用例がみられる。

Ni machota er thio dati noh selbaz thaz girati (O. IV. 35, 3)

彼はそんなことを行わなかったし，勧めることさえしなかった

und michel lahter machen / von siner verte in Irlant (Trist. 8240 f.)

そして彼のアイルランドへの旅のことで大笑いし(始めた)

さらに，machen は稀に不定詞と共に使役の意味でも，また前述あるいは後述の内容を表す ez, daz を目的語にして「そういうことをさせる，その原因となる」という意味でも用いられる。

daz machete sine sinne / in zwivele wanken (Trist. 832 f.)

そのことが彼の心をして疑いぐらつかせた

daz machet ir kintheit, / dazs ir ir willen hete geseit (Iw. 5671 f.)

姉に自分の意図を話したのは彼女の世間知らずのためでした

最後に再帰代名詞を伴う tuon と machen をみよう。どちらも用例は少なく，おおむね方向を示す副詞や前置詞句と共に基本的には「ある方向に向かう，離れる」という意

味である。

Thaht er bi thia guati, er sih fon iru dati (O. I. 8, 17)

彼(ヨゼフ)は彼女(マリア)のために彼女と別れようと考えた

der wâpen tet er sich dô abe (Parz. 92, 14)

そこで彼は武具をぬいだ

Ni sie zi thiu sih machon, sos ih iu hiar nu rachon,

thaz fruma thie gibura fuaren in thia scura (O. II. 14, 107 f.)

今あなた方にお話するように農夫たちは畑の収穫を倉に取り入れようとはしない

daz sich daz herze und al der muot / wider an die lachende bluot /

mit spilenden ougen machete (Trist. 571-3)

その人の方も目を輝かせつつ，微笑みかける花の方に心も想いもすべて向けた

4. 結び

次の表は tuon, machen の使用数とそのうちで脚韻に用いられた数を示している[16]。

	[ge]tuon	(Reim)	[ge]machen	(Reim)
Tatian	359	—	0	—
Evangelienbuch	527	182 (34.5%)	18	9 (50%)
Nibelungenlied	544	369 (67.8%)	6	0 (0%)
Parzival	605	307 (50.7%)	58	9 (15.5%)
Hartmann	747	348 (46.6%)	75	12 (16.0%)
Tristan	495	311 (62.8%)	63	25 (39.7%)

duan, tuon は用法の種類においても，頻度においてもきわめて多用されていたのに対し，machen はほとんどその十分の一にも満たない。tuon がこれほど多用されたのはその活用形の豊富さも大きな要因であると思われる。オトフリートの『総合福音書』以来，中世文学では脚韻が非常に重視されるようになる。広範な意味範囲をもち，様々な目的語をとることのできる duan, tuon はその豊かな語形と相俟って，リズムを整え押韻するのに極めて便利な用語のひとつであった。例えば，tuot に対して armuot, bluot, guot, huot, luot, muot, vluot 等，tâten に対して bâten, [be]râten, [ge]râten, kemenâten 等，tæte に対して bæte, dræte, hæte, ræte, spæte, stæte 等，tuo に対して vruo, zuo 等，tuont に対して stuont 等，押韻相手に多数の語をもち，表にみられるように tuon はほとんど 50 パーセント以上脚韻を踏むのに用いられている。本論中に引用した用例も tuon が行末で押韻しているものを多く示したが，とりわけ過去分詞 getân は gân, hân, klân, lân, plân, sân, wân 等押韻相手の語をたくさんもち，例えば

16) これらの統計数字はそれぞれの作品のコンコーダンスや辞書から筆者が分類，整理したものである。

『ニーベルンゲンの歌』では 293 例中 290, 『パルツィヴァール』では 200 例中 196, ハルトマンでは 214 例中 209, 『トリスタン』では 123 例中 118 というように, ほとんど押韻用の語とでも言えるほどである[17]。tuon がこれほど多用されたのは押韻文学と大いに関係があろう。machen の用例は極端に少ないので統計的な意味はほとんどないが, それでも上で見たように数の少なさの割りにはその用例は多様であり, tuon と競合するところ, あるいは, わずかだが Mhd. で tuon にはない用法もみられる。machen は tuon に取って代る可能性をすでに早くからもっていたと言えるであろう。

Zum Gebrauch von *duan*, *tuon* und *machen*

Osamu Takeichi

Im Nhd. spielt *tun* keine so große Rolle wie *machen*. Doch fand es in ahd. und mhd. literarischen Werken eine sehr häufige und vielfältige Anwendung. *tun* hatte schon früh seine ursprüngliche Bedeutung „setzen, legen" zur allgemeineren von „machen, schaffen" erweitert. Es wurde im Ahd. und Mhd. nicht nur zum Ausdruck einer Handlung im allgemeinen benutzt, sondern auch zum Ersatz eines vorausgehenden Verbums und zur Umschreibung verbaler Aussagen. Beim Ersetzen eines Verbums durch *tuon* gibt es verschiedene Typen, was ich bereits untersucht habe (Vgl. O. Takeichi: Zum Ersatzverb *tuon*. In: Sprachwissenschaft 17 Heft 2). Hier möchte ich den Gebrauch von ahd. *duan, tuon* und mhd. *tuon* aufzeigen und mit dem von ahd. *mahhôn* und mhd. *machen* vergleichen.

Im eigentlichen Sinne wird *tuon* mit einer Richtungsangabe gebraucht, dies ist auch der Fall bei *tuon* mit akkusativischem Reflexiv. Sonst kann *tuon* verschiedene Objekte haben, wie *imo angust giduan* (Otfrids Evangelienbuch=O. IV. 6, 29), *den fride tuon* (Nibelungenlied=Nib. 2203, 2), *daz ambet tuon* (Iwein=Iw. 1409) usw. Es wird auch funktionsverbartig viel häufiger verwendet als im Nhd., wie *gouma tuon* (=*goumen* „ein Festmahl halten" Tatian=Tat. 79, 4), *ubarwant todes duan* („den Tod überwinden" O.V. 10, 12), *entwîch tuon* (=entwîchen Parzival=Parz. 573, 13), *widerkêre tuon* (=*widerkêren* Iw. 557) usw.

tuon kann nicht nur mit persönlichem Subjekt, sondern auch mit sächlichem Subjekt stehen: *Ni mag guot boum ubilan uuahsmon tuon noh ubil boum guotan uuahsmon tuon* (Tat. 41, 4). Es hat im Ahd. einen *thaz*-Satz zum Objekt,

17) 分詞形容詞として語尾変化して付加語的に用いられたものは省いている。

ohne oder mit Demonstrativpronomen: *dua, theiz in thir scine* (O.V. 2, 17), *Ni thaz si thaz thoh datin thaz sie nan irknatin* (O.V. 9, 11). Ohne Demonstrativpronomen folgt auf *tuon* ein neuer Satz: „*Jah ih*", *quad er*, „*druhtin, duan*; *giloub ih fasto in thinan duam!*" (O. III. 20, 179) Solches *tuon* verliert die eigentliche verbale Bedeutung und wird pleonastisch gebraucht; bald soll es den Rhythmus fließend machen, Reime bilden, bald eine Aussage betonen. Bei diesem Gebrauch wird auch auf den Inhalt, der im unmittelbar folgenden mit *joh* oder *unde* verbundenen Prädikat erwähnt wird, im voraus mit *tuon* hingedeutet: *Sie ouh tho datun joh noh tho zuivolotun* (O.V. 11, 27), *daz er die altern bæte|daz sîz durch got tæte|und der jungern teilte mite* (Iw. 6919–21). Ferner kann ein zweites Prädikat ohne *joh* neben *tuon* stehen: „*Oba thu*", *quad er*, „*datist, thia gotes gift irknatis* (O. II. 14, 23). Oder *tuon* begleitet einen Infinitivsatz: *thie wizzi dua mir meron zi thines selbes eron* (O. III. 1, 28). *tuon* mit Infinitiv zur Umschreibung eines einfachen Verbs kommt allerdings im Ahd. noch sehr selten vor, z.B. in Otfrids Evangelienbuch nur dieser eine Beleg, im Tatian gibt es keinen Beleg.

Bei *tuon* mit Infinitiv läßt sich der Gebrauch zweifach unterscheiden: kausativ und auxiliar (umschreibend). Alle sieben entsprechenden Verbindungen im Tatian sind kausativ. Bei Otfrid finden sich solche außer dem oben genannten Beispiel nur zweimal in kausativer Bedeutung, und zwar mit *zi*: *uns duit sin kunft noh wanne thaz al zi wizanne* (O. II. 14, 76). Im Mhd. tritt *tuon* mit Infinitiv in kausativer wie in umschreibender Bedeutung etwas häufiger auf. Bei Hartmann finden wir im Erec (=Er.) und im Iwein je viermal einen kausativen Gebrauch, aber keinen umschreibenden; im Nibelungenlied hingegen keinen kausativen, sondern nur zwei umschreibende Belege: *daz ir mich unde Hagenen vil swache grüezen getuot* (Nib. 2363, 4).

machen findet sich in den ahd. und mhd. Werken nur wenig, doch in seiner Anwendung ist es fast so mannigfaltig wie *tuon*. Es nimmt verschiedene Substantive zum Objekt, wie *urheiz* (O. IV. 18, 18), *hôchzît* (Er. 9770), *smac* (Trist. 7836), *wec* (Iw. 5187), *wunder* (Trist. 3716) usw. Im Ahd. nimmt es einen *thaz*-Satz zum Akkusativobjekt wie *tuon*. Auch im Mhd. hat es einen *daz*-Satz ohne Demonstrativpronomen, was sich bei *tuon* kaum findet: *Hôhiu minne reizet unde machet|daz der muot nâch hôher wirde ûf swinget* (Walther 47, 7f.).

Zu *machen* kann außer einem akkusativischen Objekt noch ein prädikatives Adj. treten, wie bei *tuon*. Dieser Gebrauch ist bei den wenigen Vorkommen von *machen* verhältnismäßig häufig. Bei *tuon* erscheint er auch sehr oft. Als Prädikat zum Objektakkusativ kann im Ahd. ein Substantiv stehen: *ni curet tuon hus mines fater hus coufes* (Tat. 117, 3). Im Mhd. steht dieser prädikative Substantiv zum Objekt nicht bei *tuon*, sondern bei *machen*: *und dich hie ritter mache* (Trist. 4393). Statt des prädikativen Substantivs kann

bei ahd. *tuon* ein Substantiv mit *zi* auftreten. Wir finden im Tatian 3 solche Belege, und bei Otfrid 11: *her teta thaz uuazar zi uuine* (Tat. 55, 1). Auch dieser Gebrauch findet sich im Mhd. nicht bei *tuon*, sondern bei *machen*: *ich machete in ze ritter und gap im mîn golt* (Nib. 1755, 3).

Weiterhin dient *machen* zur Umschreibung und nachdrücklichen Hervorhebung eines Begriffs: *Ni maht avur thaz gimachon, thara ingegin rachon* (O.V. 23, 133). Sonst wird es, wenn auch selten, funktionsverbartig oder auch kausativ gebraucht: *und michel lahter machen|von siner verte in Irlant* (Trist. 8240 f.); *daz machete sine sinne|in zwivele wanken* (Trist. 832 f.).

	[ge]tuon (Reim)		[ge]machen (Reim)	
Tatian	359	—	0	—
Evangelienbuch	527	182 (34,5%)	18	9 (50,0%)
Nibelungenlied	544	369 (67,8%)	6	0 (0%)
Parzival	605	307 (50,7%)	58	9 (15,5%)
Hartmann	747	348 (46,6%)	75	12 (16,0%)
Tristan	495	311 (62,8%)	63	25 (39,7%)

Aus der Tabelle ergibt sich, wie häufig *tuon* und wie wenig *machen* in ahd. und mhd. Werken auftritt. Zum häufigeren Gebrauch von *tuon* trägt sicher bei, daß es verschiedene Konjugationsformen aufweist und bequem zum Reimen verwendbar ist. Vor allem hat *getân* zum Reimen viele Partnerwörter, wie *gân, hân, lân, plân, sân, wân* usw. Es dient im Nibelungenlied bei 290 von 293 Belegen zum Reimen, im Parzival bei 196 von 200, in Hartmanns epischen Werken bei 209 von 214, im Tristan bei 118 von 123. Es sieht fast so aus, als wäre *getân* hauptsächlich ein Reimwort. Es hängt wohl mit der gebundenen Dichtung eng zusammen, daß *tuon* im Ahd. und Mhd. so häufig gebraucht wird. Die Häufigkeit von *machen* erreicht kaum ein Zehntel der von *tuon*. Es hat den Anschein, als ob *machen* im Vergleich zu *tuon* kaum eine Rolle spiele. Es ist schwer zu erklären, wieso sich das Verhältnis von *tuon* und *machen* im Nhd. umgekehrt hat. Aber wie oben gesehen, wird *machen* für sein geringes Auftreten sehr variabel gebraucht. In bestimmten Verwendungen konkurriert es mit *tuon*, in wenigen Fällen wird *tuon* im Mhd. sogar durch *machen* ersetzt. *tuon* wird m.E. erst mit dem Verfall der Reimdichtung durch *machen* ersetzt, obwohl es schon früh die Möglichkeit dazu besaß.